随伴性自尊感情と本来感が幸福感に与える影響に関する一検討

松　隈　　快

自分の価値を感じて自分を尊重する気持ちである自尊感情は，様々な角度から多くの研究が重ねられており，自尊感情が高ければ適応的だと考えられてきていた。しかし，研究の進展により，自尊感情の高低のみで適応を考えることは難しいことが明らかになった。それにより，Deci & Ryan（1995）の随伴性自尊感情（contingent self-esteem），Crocker & Wolfe（2001）の自己価値の随伴性（contingency of self-worth）といった随伴性のある自尊感情や Deci & Ryan（1995）の本当の自尊感情といったauthenticityを伴う感情が扱われるようになった。

これまでの研究では，内的な随伴事象と外的な随伴事象のどちらがより適応的で，よりwell-beingを高めるかについて検討されることが多かった。しかしながら，これらの2つが同時に存在する場合についてはあまり検討されていなく，検討の余地がある。これを検討しているものとしては，折笠･庄司（2019）やBuckingham, Weber & Sypher（2011）の研究がある。折笠・庄司（2019）は，中学生に対して，本来感と優越感の2側面からとらえ，その2側面の程度から4つの類型を設定し，それらの比較によって学校適応上の特徴について検討している。その結果として，本来感がより適応的な機能を有しており，また本来感も優越感も高い型が最も適応的だと報告されている。しかしながら，折笠・庄司（2019）は随伴事象として優越感のみ取り上げており，随伴事象による違いはあまり検討していない。そこで本研究では，4つの「外的な随伴事象」それぞれと日本では内的な随伴事象ともいえる「本来感」の2側面からとらえ，外的な随伴事象によって生じる随伴性自尊感情と本来感の主観的well-beingに対する影響を検討することを目的とした。外的な随伴事象としては競争性，学業能力，他者からの評価，家族・友人からのサポートを設定した。なお，前者2つが個人志向的な随伴事象であり，後者2つが社会志向的な随伴事象であった。

仮説としては，次の4つを仮説とした。1）すべての随伴性自尊感情は主観的well-beingに正の影響を及ぼす。2）個人志向的な随伴性自尊感情の方が社会志向的な随伴性自尊感情よりも主観的well-beingにより大きな影響を与えている。3）すべての随伴性自尊感情は本来感が伴うことによって，主観的well-beingを高める。4）社会志向的な随伴性自尊感情の方が個人志向的な随伴性自尊感情よりも，本来感が伴うことによる主観的well-beingが高まる効果は大きい。

大学生に質問紙調査を実施し，169名の有効回答を得た。因子分析において，競争性は脱落したため，残りの3つの随伴性自尊感情について検討した結果，家族・友人からのサポートによる随伴性自尊感情が主観的well-beingに正の影響を及ぼしていること（仮説1）を除いて，仮説はすべて支持されなかった。結果として得られたことはとしては，1）本来感が主観的well-beingに強く影響を与えていたこと，2）随伴性自尊感情と本来感の交互作用は見られなく，それぞれ独立して機能している可能性が高いこと，が示唆された。